

園のおたより



第 3 号

令和 8 年 6 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

一人ひとり

園長 大向 隆三

朝、登園してくるこどもたちを園のテラスから見守っていると、実にさまざまな表情に出会います。にこにこ満面の笑みで駆け寄ってくる子もいれば、少し不安そうな顔で緊張しながら一步一步進んでくる子もいます。おうちの方と手をつなぎ、離れるのが名残惜しそうな姿もあれば、「おはよう！」と元気よくあいさつしながらすぐに園庭へ駆け込んでくる姿も見られます。そのどれもが、その子らしさのあらわれであり、かけがえのない一瞬だと感じています。

園庭で一緒に遊んでいるときも同じです。私が声をかけたら気さくに応じてくれる社交的なこどもがいる一方で、少し人見知りをして、こちらから声をかけても最初は私をじっと見つめるだけで、しばらくしてようやく小さな声で話をしてくれるこどももいます。どちらが良い、どちらが望ましいということではなく、それぞれがそのこどもの大切な個性です。にぎやかに関わりを広げていく力も、じっくりと相手との距離を大切にする姿も、どちらもこれからの人生において大事な力になるでしょう。そういえば私は、幼稚園に通っていた頃、先生から声をかけられても母の背後に隠れてしまい、口を「へ」の字にしたまま様子をうかがうようなこどもでした。

私たち大人は、ともすると「もっとこうなってほしい」という願いが先に立ってしまうことがあります。しかしまずは、一人ひとりのありのままを受けとめ、「あなたはあなたのままで大丈夫」と伝えていくことが大切だと考えています。その安心感があってこそ、こどもたちは少しずつ自分の殻を破り、新しい一歩を踏み出していけるように思います。

私たちは、こどもたちが互いの違いを自然に受け入れ、認め合いながら過ごせる環境を大切にしています。元気いっぱいの声も、そっと差し出される小さな一言も、どちらも尊重される場所（幼稚園）でありたいと願っています。これからも、一人ひとりの個性に寄り添いながら、こどもたちが安心して自分らしく成長していけるよう、努めていきたいと思っています。



働くこと

副園長 小谷 宜路

こどもたち同士、こどもと大人、いろいろな「おしゃべり」が園生活では聞かれます。家であったできごと、好きなもののこと、街で見かけたびっくりしたことなど「おしゃべり」の話題は尽きません。また、こどもたちの誰かが、朝少し気分が乗らない様子の時や、友達と何となくうまくいかない時など、どうしてそうなったのか、どんな気持ちなのかなどをこちらから聞くこともありますが、(その場面とは関係のない話題の)「おしゃべり」を一緒にしている間に、気持ちが変わっていくこともあります。

いつもの如く、園庭で数人のこどもたちと一緒に遊びながら、おしゃべりをしていた時のことです。話の流れで、携帯電話・スマートフォンが話題になりました。こどもたちは、自分のものがあつたらいいなというようなおしゃべりでしたが、私が「(自分のものが) 無くていいかな」と話すと、「えっ？会社に行かないの？」と驚いた表情が返ってきました。その人にとっては、[大人である人は会社に行き、会社で働くには携帯・スマホは必需品]という捉えがあつたようです。「会社は行かないけど...、幼稚園が会社みたいな感じ？ここで働いているんだよね」と、おしゃべりを続けました。

さて「働くこと」に関して、教育学部・大学院研究科と4つの附属学校園で取り組んでいる『共生・ダイバーシティ社会を目指す学校教育』の研究(来年度までの6か年計画です)では、一つの柱に「多様な職業」というテーマを挙げています。小中学校や特別支援学校と比べて幼稚園では、社会にある「職業」と日々の園生活を結び付けにくい面もありますが、「働くこと」として考えてみると、ぐっと身近なテーマになってきます。「職業」として働くことはしばらく先の人たちですが、片付け忘れていた椅子を1組に届ける3組の姿、先生に頼まれたことを誇らしげにする2組の姿、誰のものかわからない物を拾ってくれる1組の姿などは、「働くこと」を表現しているように思います。誰かのために自分ができることをやってみて、相手も自分もよい気持ちで一緒に暮らせることにつながることを、経済社会での「職業」に絞った視点でなく、人が人と共に暮らしていく中での「働くこと」の大切さを感じること、幼児期から取り組めることはたくさんありそうです。自分が誰かと一緒に暮らしている園にも、家庭にも、地域にも、たくさんの「働く」があることに気づき、自分も「働きたい」という気持ちが生まれるような場面を大切にしていきたいものです。

さて、先ほどの場面では、こどもたちの話題は次々に移り変わっていき、それ以上、働くことについてのおしゃべりはありませんでしたが、「働くこと」について、ふとした楽しいおしゃべりの中に現れる話題かも知れません。こどもたちが「働くこと」をどのように感じ取っているか、また、おしゃべりする機会があれば聞いてみたいと思います(こちらが仕向けると「おしゃべり」にはならないので、難しいところではありますが...)。



1 くみ

「一緒に心地よさ」

雨や湿り気の多いこの頃の生活ですが、こどもたちの姿を見ると、うまく心地よい場所を選びながら遊ぶ姿があります。また、心地よさは身体で感じるばかりでなく、誰かといたり、一緒に何かをしたりすることで心からも感じられるものでもあると強く思われます。

今月の初め頃から「おおかみと七ひきのこやぎ」のイメージでごっこ遊びを楽しんでいる人たちがいます。レンガの家を作って、おおかみから隠れたり、ごちそうを食べたりするお話の中に出てくる動きや、やりとりをしていました。最初は2、3人で遊んでいましたが、言葉の響きや動きの面白さから多くの人が集まって一緒に遊ぶようになりました。楽しげな雰囲気から集まってきた人たちは、最初そこにいるだけで心地よい様子でした。しかし、毎日のように場所や形を変えながらごっこをしているうちに、ひつじのつもりで動いてみたり、ダンボールで作ったトンカチをもって大工のつもりで場所を作ったりして、自分のイメージを加えながら遊ぶ姿が見られるようになっていきました。友達との心地よさが新たな楽しさにつながったひとときでした。

遊び以外でも、なんだか一緒にいるのが心地よく、着替えをしたり、お弁当を食べたり、様々な生活の場面で「一緒にいい」という思いをもって過ごす姿が見られます。ある日のお弁当の時間には、一緒にいるのが心地よさそうに、一つのテーブルに8人が譲り合いながら座ることがありました。（食事をするにはスペースが狭かったので、もう一つテーブルをつなげました。）「一緒に」が嬉しく、心地よさそうな姿がとても微笑ましかったです。昨年度の園の研究テーマは『「友達」とは何でしょうか』でしたが、1組の最近の姿から、人と人とが出会って「友達」になっていく過程にある「心地よさ」の大切さに気付かせてもらいました。





2くみ



「広がる楽しさ」

6月になり、2組になって初めての遠足に行きました。別所沼公園まで歩いていくという普段とは異なる体験をみんなでしたことで、2組と一緒に過ごす友達のことをより感じながら過ごす姿が多くなったように感じます。

先日、園庭で「忍者」たちがレベルをあげるために修行の場を作っていました。始めはビールケースを一行に並べ、その上を歩いていました。しばらくすると、ビールケースの間隔をあけてジャンプして跳び移れるようにしたり、2段、3段とビールケースを重ねて乗り越えられるようにしたり、少し不安定なところにベンチを置いてグラグラ橋にしたり、やぐらの高いところから飛び降りる修行を入れたり、修行を進める中で徐々に難しいコースになっていきます。その様子を見て、普段「忍者」をやっていない人も集まり、修行に加わり始めました。「こんなの忍者だから簡単だよ」と得意気に話す人もいれば、最後まで渡り切れるように真剣な顔で集中して動く人など様々な姿がありました。一緒に遊んでいる人の動きや言葉から、“もっと本物の忍者に近づきたい”という気持ちが広がり、同じような気持ちをもちながら修行を進めることに面白さを感じていました。

室内では画用紙で作った耳を身に着け、ウサギになった人が集まり、ついたてやマットを使い、自分たちの家を作っていました。「これも持っていきましょう」と話しながら、食べ物やお皿、ドレスを自分たちの家に持ってきたり、「人参が必要だよ」と先生と人参を作ったりして、どんどん素敵な家にしていきます。その様子を見ていた人が自分も入ろうと家の扉を叩くと、「ウサギの耳がなくちゃ入れないんだよ。こうやって作るのよ」と友達同士で作り方を教え合い、自分の物が出来上がると嬉しそうにウサギの家に加わり、人参パーティーが始まりました。同じ物を身に着けることで、それぞれの気持ちや遊びのイメージがつながるきっかけになり、遊びの中で新しい関わりが広がっているようでした。

作った場や身に着けるものをきっかけに、友達が集まり一緒に遊ぶ姿が増えてきています。友達と同じ経験をする中で、新しい関わりや“楽しい”気持ちが広がっていくよう遊びや友達との関わりを支えていきたいと思います。



3くみ



『ホンモノ』から思うこと

最近「ホンモノ」についていろいろ頭をぐるぐるさせています。こどもに本物に触れてほしい、自然のものに触れたり、なるべく自然のものを食べたりしてほしいと願いを込めて保育をしています。

3組は収穫した野菜を食べて、美味しいと喜ぶ人が多いです。自然のものを体が喜んで取り込んでいることも感じます。自然の恵みをいただくことは、当たり前ではありません。世界には、それは夢のような出来事と思う人もあるでしょう。わたしたちが生きる環境は、実は奇跡のようなことばかりです。朝に目が覚めること、食べたら美味しいと思えること、体が動くこと、いろいろなものが美しいと思えること…。当たり前を失った時に初めて気づくこともあるかと思いますが、感謝することに溢れていることを感じて暮らすことも大切です。

3組では、畑で育てているカブが、土から出てきてしまったので、土寄せをしました。そして、べにはるかや小豆も今のところよく育っています。こどもたちは、グループの当番の時に、またはクラスの友達と一緒に『草ちゃんのお引越しをする』として、草を別の場所に移動させています。畑の野菜の栄養は大切にしたいけれど、草も敵ではないし大切にしてほしいという理由です。時に雨が降ると畑の野菜が喜んでいることに喜んだり、水やりをしなくてよいのでホッとしたり、草ちゃんが大きくなると、こんなに大きくなるのかと驚いたり、40個も草ちゃんを取ったと手に40を感じたりして、いろいろに自然を感じながら暮らしています。

かつて、わたしの恩師がロシア民話『おおきなかぶ』のことを教えてくれました。絵を描いた佐藤忠良さんは、日本を代表するアーティスト（彫刻家）です。真の芸術家がこどものためにホンモノを描こうとしたエピソードです。

～佐藤さんがシベリア抑留の経験から、ロシアの建物や風景を、登場人物・動物の姿、かぶの葉等々、描こうとしたりすることはとても難しかったそう。時間を要していた様子を見た誰かが「こども相手のものですか」と口にした時、佐藤さんは「わたしは、こどものものを描いているのだ。本当のこと、真実を描こうとしているのだ」と怒った～

こどもたちが自然を体で感じる様子と、このエピソードは、「ホンモノ」をよく分かっている姿としてつながります。こどもにこそ「ホンモノ」を、という考え方を大切にして暮らしていきたいです。